史跡山形城跡ⅩⅧ　二ノ丸土塁（南西部）発掘調査現地説明会資料

平成25年8月31日（土）　山形市教育委員会社会教育青少年課

調査要項

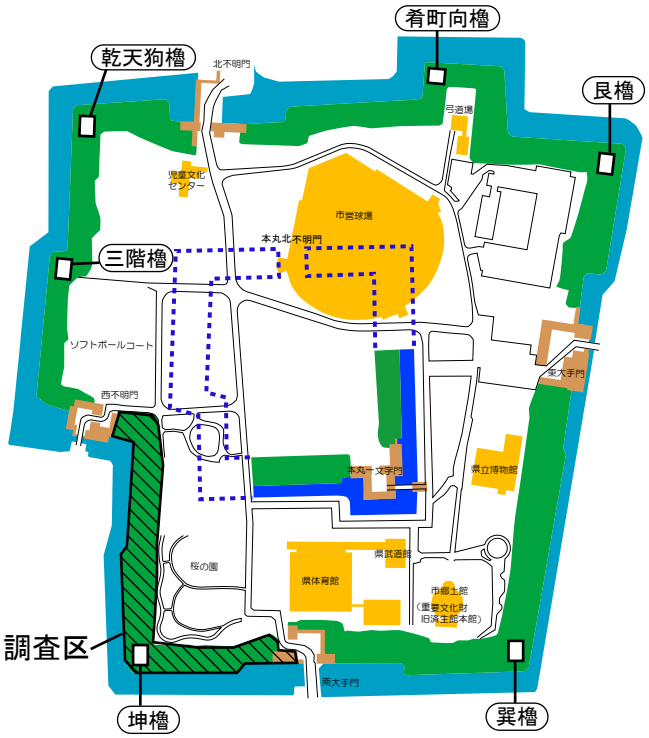
遺　跡　名	国指定史跡　山形城跡
所　在　地	山形市霞城町（霞城公園）
遺跡番号	１番（山形県遺跡地図）
調査期間	平成２４年６月１日～９月２８日　　平成２５年５月２３日～９月３０日（予定）
調査面積	約２００㎡
調査原因	史跡山形城跡（霞城公園）二ノ丸土塁園路整備事業
遺跡種別	城郭（近世城郭）
時　代	近世・近現代
遺　構	石垣、土塀礎石石列など
遺　物	瓦類、陶磁器など
調査事業の主体	山形市公園緑地課
調査実施の機関	山形市教育委員会
調査担当	山形市教育委員会社会教育青少年課

１　概要

山形城跡は、最上義光が拡張整備したといわれる本丸、二ノ丸、三ノ丸からなる平城（ひらじろ）です。現在、二ノ丸から内側は霞城公園として憩の場となっていますが、昭和61年国史跡指定を受けて以来整備が進められ、二ノ丸東大手門や本丸一文字門石垣などが復原され新たなシンボルとなっています。整備は引き続き行われ、今年度は二ノ丸の土塁を調査しました。

山形城の二ノ丸土塁には土塀が廻らされ、要所要所に櫓が築かれていました。今回の調査区は二ノ丸南西部に位置し、当時の城絵図では、土塀の他、南西隅に坤櫓（ひつじさるやぐら）があったことが確認できます。

今回、調査が終了したあとは歩きやすいように新しく園路を整備するとともに、坤櫓の石垣は復原する予定です。



歴代藩主年表

和暦	西暦	藩主	石高
延文元年	一三五六		
慶長五年	一六〇〇	斯波兼頼	
元和八年	一六二二	最上義光	五十七万石
		最上家親	
		最上家信（義俊）	
寛永十三年	一六三六	鳥居忠政	二十二万石
		鳥居忠恒	
寛永二十年	一六四三	保科正之	二十万石
正保元年	一六四四	幕府領	
慶安元年	一六四八	（結城）松平直基	十五万石
寛文八年	一六六八	（奥平）松平忠弘	十五万石
		奥平昌能	九万石
		奥平昌章	
貞享二年	一六八五	堀田正仲	一〇万石
貞享三年	一六八六	（結城）松平直矩	一〇万石
元禄五年	一六九二	（奥平）松平忠弘	一〇万石
		（奥平）松平忠雅	
元禄十三年	一七〇〇	堀田正虎	一〇万石
		堀田正春	
		堀田正亮	
延享三年	一七四六	（大給）松平乗佑	六万石
明和元年	一七六四	幕府領	
明和四年	一七六七	秋元涼朝	六万石
		秋元永朝	
		秋元久朝	
		秋元志朝	
		水野忠精	
弘化二年	一八四五	水野忠弘	五万石
明治二年	一八六九		

２　検出された遺構

（１）坤櫓（ひつじさるやぐら）

①名称の由来

坤櫓は、二ノ丸土塁の南西角に位置する隅櫓のひとつです。江戸時代の方角は干支で表現していましたが、南西は坤（未申）ですので、櫓もこの名称で呼ばれました。二ノ丸土塁にはこの他、巽櫓（たつみやぐら）、艮櫓（うしとらやぐら）、乾天狗櫓（いぬいてんぐやぐら）の三ヶ所の隅櫓のほか、西側に三階櫓、北側に肴町向櫓（さかなまちむかいやぐら）がありました(1 概要参照)

②残存状況、規模

坤櫓の櫓台となる石垣が検出されました。石垣の規模は南北約 10.1m、東西約 7.2mで東側に雁木（がんぎ）と呼ばれる階段が設置されていました。石垣の高さは最大で 4 段、約 1.4m程残っていましたが、天端石（一番上の石材で建物を支える部分）はありませんでした。江戸時代の城絵図などから推定すると、当時はさらに 60 ㎝程高く積まれていたと推定されます。

③石垣の積み方

最下段（1 段目）の根石（ねいし）には、加工されていない玉石を設置しています。根石は築造当初から土に埋まっている状態でした。2 段目以上は加工された割石を用いており、石材の前面（正面）は石垣の平面性を特に意識したようで、平らに成形され、石材と石材の間に空間が生じる場合は間詰石（まづめいし）と呼ばれる小石を充填しています。四隅の石材は他の石材より大きめの直方体に成形された割石を交互に積み上げる算木積み（さんぎづみ）という技法で積まれており、より強度を高めています。

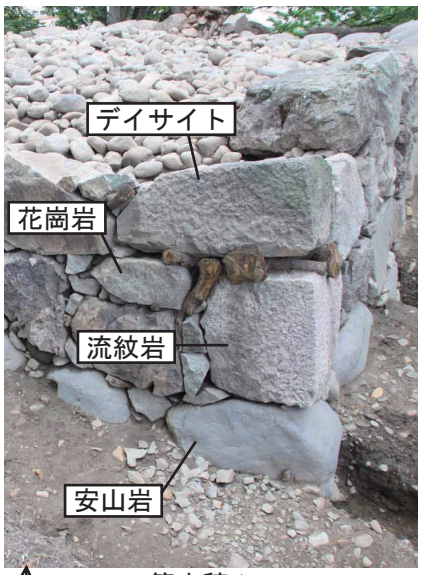
④石材の種類

石垣に使用された個々の石材の調査は、山形大学の大友幸子教授に依頼し、表１のような結果を得ております。この中で､①安山岩は根石で用いられ、ほとんどが未加工の玉石です｡②花崗岩（かこうがん)､③デイサイト､④流紋岩（りゅうもんがん）は 2 段目以上の割石で用いられています。これら②～④の 3 種の岩石は割れやすく加工しやすいので、割石に使用されたと考えられます。

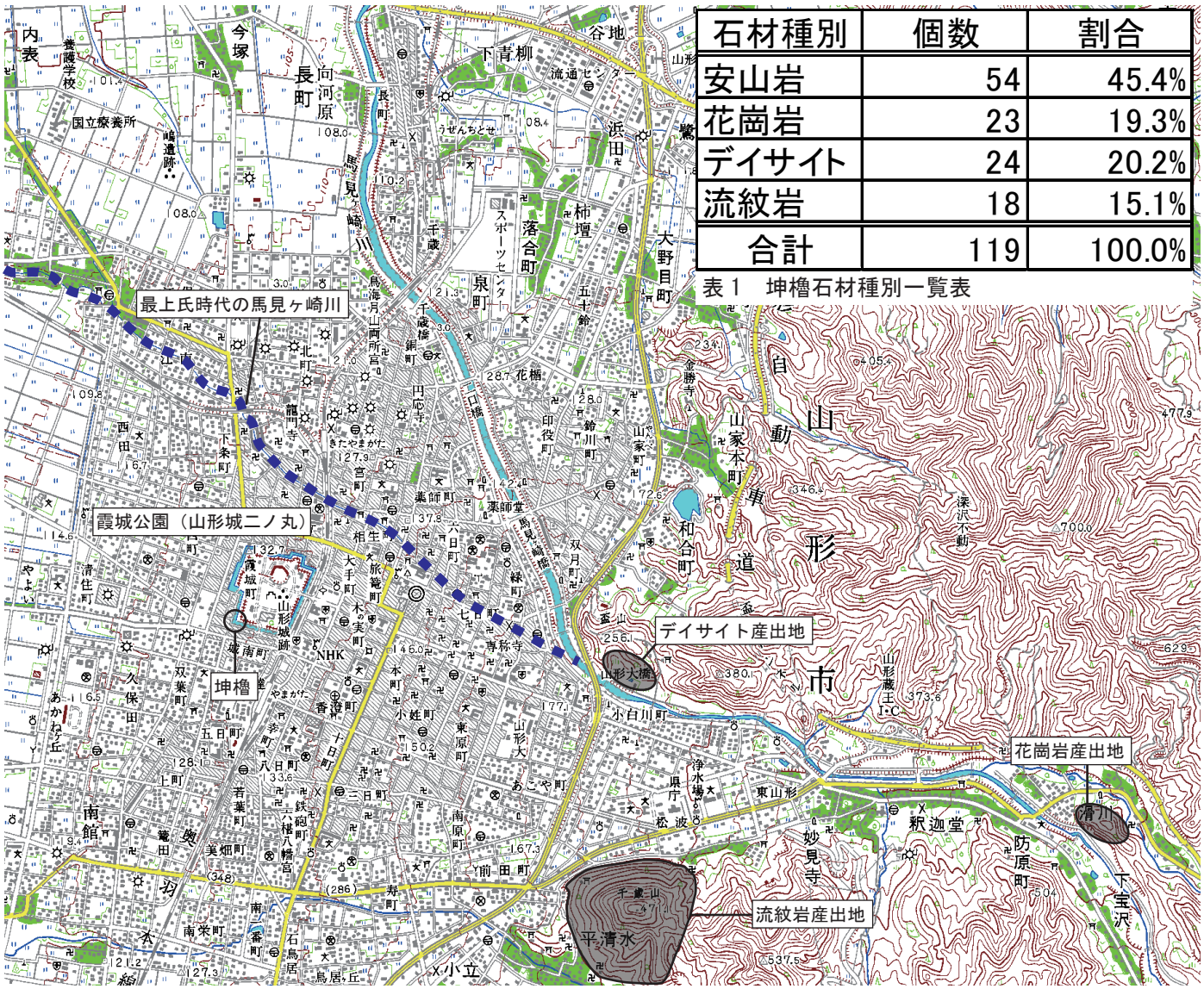
②③④の石材はある程度産地が判別できました｡②は馬見ヶ崎川に滑川が合流する市立東沢小学校の東側の丘陵､③は市民プールジャバの北側､④は千歳山山麓です。

⑤築造年代

山形城は元和 8 年(1622)に最上氏が改易された後に入部した鳥居氏によって改修されたと伝えられます。その時、二ノ丸は霞城公園として残っている現在の形になったと考えられます。坤櫓もその時造られた土塁の上に立地しているので、おそらく鳥居氏の段階の築造と推定しています。



算木積み



石材種別	個数	割合
安山岩	54	45.4%
花崗岩	23	19.3%
デイサイト	24	20.2%
流紋岩	18	15.1%
合計	119	100.0%

表１　坤櫓石材種別一覧表

図１　坤櫓石材産地位置図（5 万分の 1）

（２）土塀礎石（どべいそせき）

山形城の城絵図には土塁の頂上に土塀が描かれていますが、今回の調査で、その礎石である石列を検出することができました。周囲から瓦が出土しましたので、この塀には瓦が葺かれていたと考えられます。瓦の重量を支えるためにこのようなしっかりとした礎石が必要だったのでしょう。

また、土塀の礎石の石列に並行して、堀側の斜面側にも石列を一部検出しました。土塁が崩れて土塀が傾かないよう土留めを施したと考えられます。

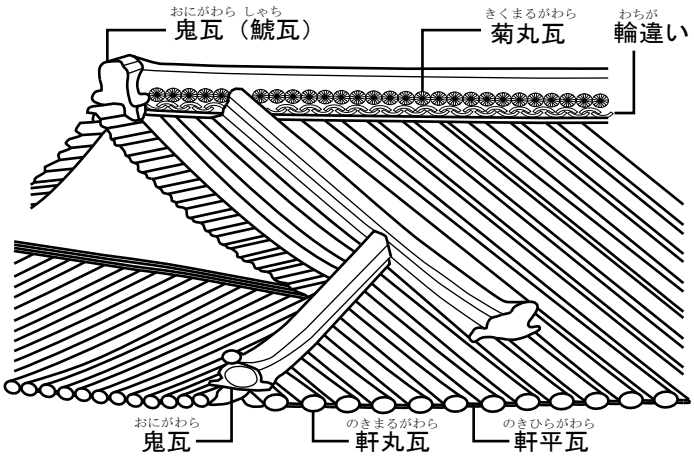
３　出土遺物

坤櫓の周辺からは、大量の瓦が出土しました。昨年度の調査では約4.6トンもの瓦が出土しました。今年度はまだ整理中ですが、昨年度以上の瓦が出土しているので、総重量は10トン程になるとみられます。

櫓の建替えの度に、建替え前の建物に葺かれていた瓦を周囲に投げ捨てていたようです。瓦が投棄されていた土層を観察すると、おおよそ３層に分かれるのが確認されたので、櫓の建替えは３度あったと考えています。

瓦は大きく分けて黒瓦と赤瓦の２種類があります。後者はおおよそ1700年代以降に用いられる瓦で、釉薬などを施されたものもあり、前者に比べ耐久性があります。

鬼瓦　鬼瓦は屋根の大棟などに葺かれる瓦で、厄除けと装飾などを目的としています。この鬼瓦は堀田氏の家紋が描かれているので、堀田氏の時代に葺かれたことがわかります。



一屋根瓦模式図一

軒丸瓦　軒丸瓦の文様は、ほとんど三巴文が描かれます。巴文は水が渦を巻くさまと解釈されたことから、水に関する文様とされ、火災除けとして屋根瓦に用いられるようになりました。ここに掲載した写真は今回の調査で出土した文様の中で、一部の代表的なものを掲載しました。おおよそ、左が古く（下層出土）、右が新しい時代（上層出土）の文様です。

軒平瓦　軒平瓦の文様は、中心に宝珠文や三葉文、五葉文を配置し、両脇に唐草を描いたモチーフが用いられます。これも今回出土した代表的な文様の一部です。軒丸瓦同様、おおよそ左上が古く（下層出土）、右下が新しい時代（上層出土）です。

文字瓦

「大内」の文字が描かれていた瓦です。大内氏は江戸時代を通じて、山形藩の瓦職人を統括する立場で、苗字帯刀を許された人物です。